

比較史研究会『市場経済と資本主義』発表要旨

「国際ゴム協定(1934年)と密貿易： ボルネオ西部国境地帯におけるゴム市場と焼畑農民」

京都大学東南アジア研究センター
石川 登

1. 事例：ボルネオ西部国境地帯と国際ゴム協定

1934年の国際ゴム協定(International Rubber Agreement)は、西洋列強諸国が、植民地のゴム生産と輸出の調整を通して、ゴムの国際価格の下落を抑えることを目的とするものであった。インド、セイロン、マラヤ、インドシナ、蘭領東インドなどの植民地は、イギリスやオランダなどの宗主国が締結した協定のもと、急激な生産削減と輸出制限を強いられた。本発表で考察の対象とするボルネオ西部国境地帯（現マレーシア、サラワク州と現インドネシア、西カリマンタン州）も例外ではなく、世界規模の生産調整スキームのもと、ゴム栽培農民たちは新規ゴム植え付けの禁止および樹液採取制限、そして商人たちは生ゴム板の売買制限を体験することになる。

国別の生産量/輸出量の割り当てに基づく国際ゴム協定のもとでは、蘭領ボルネオとサラワクという植民地国家が経済的単体としてのかたちを明確にしていくと同時に、国境部という国家領域の最周縁部では、これに対抗するトランスナショナルな経済活動が発生した。すなわち、ゴムの密貿易圏の成立である。サラワク/蘭領サンバス国境地帯では、国家枠をこえた密貿易市場が形成され、大量の蘭領サンバス産生ゴム板が、市場価格のより高いサラワクに流入した。

このようなゴム密貿易市場の形成過程において、国家によって分断されたボルネオ島西部のマレー農民社会は、きわめて特徴的な経済的特化を経験する。蘭領サンバス地方では、ポンティアナックを中心とした西ボルネオ市場経済の発達なかでマレー農民の周縁化が進み、ゴム密貿易の活性化にともない、国境を越えたサラワク側の市場経済への依存を高めていく。一方、トランスナショナルかつインフォーマルな密貿易市場の成立のもとで、サラワク側の国境部は、ゴム生産から除外された商品作物経済の空白地帯と化し、地域農民は、焼畑陸稲耕作を中心とした自給経済へ特化することになる。

2. 考察

1) 世界的資本主義経済とローカルな市場の接合

本発表は、1934年の国際ゴム協定を分析上の焦点としながら、ボルネオ西部国境地帯における「世界的資本主義経済」「市場」「自給経済」の結びつきを考察するものである。ついでに、国際ゴム協定を契機として、ローカルな市場が世界大の資本主義と直接連動する歴史的モーメントに注目し、その絡み合いを具体的事例の検討を通して明らかにしたい。

ローカルな諸社会とそれを越えた大きなシステムの関係は、たとえば構造主義的マルクス主義の極めて抽象的な「接合」(articulation)概念をもちだすまでもなく(Foster-Carter 1977)、すでに様々なかたちで検討されてきた。国際ゴム協定を通じた世界規模の産業資本主義とゴム生産社会の接合状況は、例えば、F.ブローデルにしたがえば、「政治史」(「事件」)と「社会史」(「局面状況」)という二つの歴史時間の連動と考えることも可能であろう(ブローデル 1989, 1991-95)。また、彼が提示した三層ヒエラルキーの構図になぞらえば、「交換のはたらき」としての市場経済と「世界時間」としての資本主義的世界経済の双方が国際ゴム協定成立という政治的事件を通して結節した状況とみることもできる(ブローデル 1985-96)。M. ウェーバーや I. ウォーラーズテイン、そして A. G. フランクなどの視座によれば、局所的なゴム市場とロンドンのゴム市場の直接的な接合により"Mercantilism"と"World Economy"が、東南アジア島嶼部辺境のゴム生産社会において、一系的な移行ではなく、突然共存するようになった歴史的局面と捉えることが

できるかもしれない(Frank 1966, Wallerstein 1974, 1980, cf. Wolf 1982)。

本発表は、市場経済と資本主義をめぐって提出されてきた分析枠組や概念を、歴史資料と臨地調査に基づいた事例を通して再検討するものであり、20世紀前半の自動車産業と直結した産業資本主義、ローカルなゴム市場と商人、そして国境地帯の農民社会を対象としながら、従来のメタ・レベルの経済史に限定的な地域史を照射することをねらいとしている。

2) 地域史と「受動的周縁」

国家が経済的機構として明確なかたちをとると同時に、国境部という国家支配の最周縁部においては、これに対抗する経済活動が成立する。密貿易という反国家的なインフォーマル・エコノミーの成立のなかで (cf. Castells and Portes 1989)、焼畑陸稲生産に基づく自給経済へ特化していった農民社会の歴史過程は、植民地国家により導入された商品作物経済への包摂といった巨視的かつ一系的なシナリオからはずれるものである。商品の生産よりも、むしろ非生産に傾斜していく地域社会の出現は、換金作物生産者の創出という20世紀前半のサラワクに支配的な歴史過程のなかでは異質な歴史といえる。しかしながら、人類学における歴史記述の目的と意義が、世界史的なイベントの記述ではなく、中心よりも周縁的な歴史、そして偶発的もしくは散発的な出来事として捨象されてきた社会史への再接近であるとすれば、本発表における辺境社会の歴史の検討も意味があると思われる。

東南アジアにおける1910年代以降のゴム栽培の本格的拡大のなかで、サラワクの多くの辺境部農民社会も、国際ゴム協定発動時には、すでに世界規模のゴム経済に包摂されていた。その社会変容の過程は、一見したところ、「近代世界システム」や「従属理論」などで示されたような資本主義的システムの世界的な浸透および中核としての西ヨーロッパに対する従属的国家群の形成という構図のなかで語られるべきものであろう。しかしながら、ボルネオ島西部国境部の農民社会は、全く異なった歴史を私たちに提示する。本発表が検討するのは、サラワクの1920年代、1930年代、そして戦後のブーム期にもゴム生産に従事せず、南シナ海に面した沿岸部という生態学的条件にもかかわらず、自給自足的な焼畑陸稲耕作をおこない、散発的なココ椰子と森林産物の取引に依存し続けた村々の歴史である。

そもそも「近代世界システム」などのメタ理論における分析単位は、世界的な経済システムのなかの単一国家または国家群であり、コミュニティから地域、地域から国家へと、その考察対象の枠を徐々に拡大してきた人類学の議論とは基本的に性格を異にする。また、これらの理論においては、人類学者がフィールドで対面する人々の戦略や選択は考察から捨象され、個人、世帯、そしてコミュニティは、単に、換金作物の生産者ないし産業セクターの労働力として、世界史的な資本主義的な包摂過程における「受動的周縁」(passive periphery)として扱われてきた(Nash 1981)。このような国家を最小関数とするマクロな分析枠組では、歴史的固有性をもった市場と地域の動態を明らかにすることはできない。臨地調査者に取り扱い可能な地域史のアセスメント、システムや制度ではなく、意志決定の主体としての個人、世帯、ならびにローカル・コミュニティへの注目、国家を最大の分析枠組としながらも、なおかつトランス・ナショナルな視座の模索(cf. Sassen 1998)といった視点は、単にマクロな経済史への人類学側からの反発といった限定的な関心にとどまらず、比較史研究における共通認識項としても重要な問題を提起するものである。

参考文献

Borochoy, B.

1937 *Nationalism and the Class Struggle: A Marxian Approach to the Jewish Question*. New York: Poale-Zion.

ブローデル F.

1985 - 1996 『物質文明・経済・資本主義 15-18 世紀』、村上光彦他訳、東京：みすず書房。

1989 「長期持続：歴史と社会科学」『フェルナン・ブローデル』井上幸治編集・監訳、東京：新評論。

1991 - 1995 『地中海』I - V、浜名優美訳、東京：藤原書店。

Castells, M and A. Portes.

1989 World Underneath: The Origins, Dynamics, and Effects of the Informal Economy, in *The Informal Economy: Studies in Advanced and Less Developed Countries*, (eds.), A. Portes, M.Castells, and L.A. Benton, London: The Johns Hopkins University Press.

Foster-Carter, A.

1977 Can We Articulate Articulation? *New Left Review* 107: 47-77.

Frank, A.G.

1966 The Development of Underdevelopment. *Monthly Review* 18: 17-31.

原 洋之介

1995 『地域研究と経済学』重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ No.6、京都：京都大学東南アジア研究センター。

石川 登

1997 「境界の社会史：ボルネオ西部国境地帯とゴム・ブーム」(特集：「ポリティカル・エコノミーと民族誌」大塚和夫編集)『民族学研究』61(4): 586-615.

「空間の履歴：サラワク南西部国境地帯における国家領域の生成」『地域性の形成論理』坪内良博編著、京都：京都大学学術出版会(印刷中)。

Ishikawa, N.

1998a *Between Frontiers: The Formation and Marginalization of a Borderland Malay Community in Southwestern Sarawak, Malaysia, 1870s-1990s*, Ph.D. Thesis, The Graduate School and University Center, The City University of New York.

1998b A Benevolent Protector or Failed Exploiter?: Local Response to Agro-economic Policies under the Second White Rajah, Charles Brooke (1871-1917) of Sarawak, Shamsul A.B. and T. Uesugi (eds.), *Japanese Anthropologists, Malaysian Society: Contribution to Malaysian Ethnography*, pp.71-98, National Museum of Ethnology, Osaka.

Nash, J.

1981 Ethnographic Aspects of the World Capitalist System, *Annual Review of Anthropology* 10:393-423.

Saskia Sassen

1998 *Globalization and its Discontents*, New York: New Press.

佐藤次高・岸本美緒（編）

1999 『市場の地域史』、地域の世界史 9、東京：山川出版社。

Wallerstein, I.

1974 *The Modern World System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World Economy in the Sixteenth Century*, New York: Academic Press.

1980 *The Modern World System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World Economy*, New York: Academic Press.

Wolf, E.

1982 *Europe and the People without History*, Berkeley: University of California Press.